

座談会： メディアセンターとのつきあい方と今後について

〈出席者〉 あさの よしひろ いなさき さえ
浅野 義弘 稲崎 彩絵
(環境情報学部4年) (環境情報学部4年)

きむら のりひこ まつざき ゆうた
木村 紀彦 松崎 裕太
(総合政策学部3年) (環境情報学部4年)

やなせ みちよ いば たかし
梁瀬三千代 井庭 崇 (司会)
(湘南藤沢メディアセンター主任) (総合政策学部准教授)

梁瀬： メディアセンターの梁瀬です。本日はお集まりいただきましてありがとうございます。本日の司会と進行は井庭先生にお願いしたいと思います。

井庭： 総合政策学部准教授の井庭です。私はSFCの4期生で、学部生のときにはメディアセンターでAVコンサルタントも3年くらいやっていました。当時は『CNSガイド』以外にも『AVガイド』という冊子もつくっていて、その編集にも携わりました。教員になってからはメディアセンターにあまり行かなくなってしまいましたが、学部生・院生の時はかなり利用していて、本をたくさん借りましたし、機材も相当使いました。



井庭 崇氏 (総合政策学部准教授)

浅野： 3Dプリンターの研究などを行っている田中浩也研の浅野です。メディアセンターフレンズ (以下「フレンズ」) をやっています。メディアセンターとの最初の関わりは

AVコンサルタントで、田中研に所属していたのでファブスペース (以下「ファブ」) のサポートがきっかけとなってAVコンサルタントになりました。コンサルタントをやっているうちに、メディアセンターが主催するイベントをみて「面白そうだ」と思い、今年の1月からフレンズに入りました。

井庭： 最近はフレンズっていうのがあるの？

浅野： メディアセンターで行う各種イベントの企画や提案を学生が行い、準備や当日のイベントの取り仕切りをスタッフの方と協力して行っています。

木村： 「本の福袋」もフレンズの企画ですか？

浅野： そうです。

稲崎： ドイツ語研究室・藁谷研の稲崎です。2年生の春からAVコンサルタントをやっています。同じAVコンサルタントですが、ファブとの関係は浅野君とは逆で、AVコンサルタントになってからファブとか3Dプリンターを知りました。

木村： 総合3年の木村です。井庭先生の研究室です。ここでは僕が一般利用者の代表かもしれませんが、実はあまりメディアセンターは使っていません (笑)。

井庭： でも、本はよく読むよね？

木村： はい。よく本屋に行きますし、必要な本は自分で買って読みます。

松崎： 国会議員をされていた鈴木寛先生の研究室や脳科学の青山敦研に所属している松崎と申します。

井庭： それでは座談会をはじめましょう。まず、みなさんとメディアセンターとの関わり方について話しましょう。学生スタッフとしてサポートする立場の人もありますし、利用する人、あまり使っていない人もいますが(笑)。ざっくばらんにどうぞ。

〔「出会いの場」としてのメディアセンター〕

稲崎： 結構、本を借りますね。

木村： 僕はほとんど本を借りません。入学して3年間で10冊くらいかな？

井庭： そうなんだ。本棚のコナへも行かない？

木村： 行きませんね。

松崎： 僕は本棚にも行きますし、借りることも多いです。借りずにその場で読むこともあります。特に外国語の本は、自分で買うには高いのでよく利用しています。

浅野： 1, 2年生の時は頻繁にグループ学習室を使っていました。でも、3年生になって、研究室に所属するようになると、メディアセンターを利用する機会は減ったと思います。反対に、本を借りることは増えました。

稲崎： 私もグループ学習室を1, 2年時によく使っていました。



稲崎 彩絵氏 (環境情報学部 4年)

井庭： 私が学部生で竹中平蔵研だったときには、学生が自由に使える研究室がなかったし、資料も必要だったので、メディアセンターに入り浸っていました。特に放課後は閉館時間近くまで、毎日のようにこもっていたと思う。研究会の他の仲間もだいたいそこ

にいたので、オープンな研究室みたいな感じでした。

松崎： 研究会終わりにメディアセンターで仲間に出会う、というのがありますよ。それよりも「時間つぶし」の方が多いかな。合間の時間をメディアセンターで過ごしています。

井庭： 湘南藤沢メディアセンターの蔵書って、三田のメディアセンターよりも少ないけれども、それをうまく利用したという記憶があります。授業や研究である分野について調べようと思ったら、本棚の端から端までを片っぱしから見ていくんです。例えば、マーケティングについて調べるなら、その本棚にある全ての本を順に手にとって目次を見たり、パラパラと中身を見たりする。やろうと思えば、数時間でその棚のすべての本に目を通せる。そうやって、分野の感覚をつかむ。メディアセンターにある本だから悪い本ではないだろうと信じてね(笑)。

木村： そんなにメディアセンターによって蔵書が違うのですか？

稲崎： 違いますよ。

井庭： 昔は取り寄せのサービスがなくて、検索システムで所蔵館が三田所蔵って出てきた時には「ガーン」ってなっていた(笑)。

松崎： 今でもそういうサービスがあるのを知らない人が多いと思います。

木村： 古い本とか、本屋に置いていない本は図書館から借りるというイメージですか？

井庭： たしかに古い本は図書館だよ。他には1階のファブスペースについてはどう？

浅野： ふらっと立ち寄れる場所って感じでしょうか。図書館と比べて。

井庭： ファブを利用する人は増えている？

稲崎： 増えています。きっかけは授業や課題で利用する人が多いのは事実ですが、趣味などで利用する人も増えています。

浅野： 今回のリプレースでレーザカッターやミシンが入ったのが大きいと思います。刺繍が好きな人、いわゆる「デジタルなモノづくりでない人」の利用も増えています。学校の図工室的な空間という感じです。

井庭： 確かに、いきなり本格的な「ものづくり工房」だと敷居が高いよね。昔、私もメディアセンターでダブルデッキとかAVロールという機材があって、ふらっと立ち寄っては、次は何つくろうかなあ、とか考えていました。

浅野： 「場所」が大事だと思います。ここまできたらほんだごてで作業するスペースも一緒に欲しい。グループ学習室でやっても良いのか？とか考えるのは面倒なので。

井庭： たしかに、ほんだ付けはできててもよいかもね。匂いの問題があるかもしれないけれども。皆さんの話を聞いてると、「つくる」という方向性が良いと思いました。

稲崎： いい意味で図書館らしくないですよ。三田のメディアセンターは「ザ・図書館」という感じですし、藤沢のメディアセンターは最初からメディアセンターだったのですか？

梁瀬： そうです。他のメディアセンターは、図書館→情報センター→メディアセンターのように変遷してきています。

松崎： 外から中が見えるのも良いですよ。あんなことをやっている。いいなーっていうのがわかりますから。

稲崎： 他の人がやっているのをみると、気になるというか、関心を持ちますよね。

松崎： 他のメディアセンターや他大学にないものとして「ビデオカメラの貸出」があります。場所があって、ニーズに合わせたものが提供されているのが、湘南藤沢メディアセンターの良さだと思います。

稲崎： 私はドイツ語の研究室にいたのでファブとは無縁のバックグラウンドなのですが、水野研とか田中研のファブに詳しい人が周囲にいて、その人たちに助けてもらえることで私もファブに挑戦できました。違う分野の人がそばにいて、すぐに聞けるということがSFCの良いところだと思います。もし、私が三田や日吉で言語学を専攻していたら、全然違っていたと思います。「専門の垣根を超えるのがSFCの魅力」だと思います。

浅野： 自分の分野でない人と直接話せる、触れ合うことができるというのが、このメディアセンターの良いところですよ。

松崎： 僕も「出会いの場」という感じがします。昔のグループワークの仲間と再会したり、課題をやっているサークルの後輩と出会ってディスカッションしたり、ということが自然に起きる場所がメディアセンターだと思います。「会話のできる窓口」という感じですよ。

稲崎： SFCの学生の性質とも関係があると思います。SFC生は他の人に自分の得意なことを教えてあげたいという人が多いように思うのですが、そういったことを促す「場」としての機能がメディアセンターにはあるように思います。

井庭： 出会いのチャンスってやつだね。木村君はどう？

木村： 僕はそういうのは必要なくて、どちらかというと「本と出会い」たいですよ（笑）。

（これからメディアセンターに期待するもの）

井庭： メディアセンターができた25年前から現在までを「メディア」について振り返ってみると、当時はメディアリテラシー、つまり、図書や雑誌、映像などの様々なメディア（マルチメディア）があって、リテラシーと言われるものの中心は、情報を鵜呑みにしないように「情報を読み取る力」が重視されていました。しかし、最近では、情報の読み取り能力よりも、新しいメディアを「つくる」とか「デザイン」するといった要素が重要視されています。そういう意味で、ファブスペースはわかりやすい象徴的な例ですね。具体的に新しいモノを生み出しますから。ですから、これからは、他の研究分野において、何を「つくる」ことができるのか？というあたりが重要で、面白くなっていくポイントだと考えています。

稲崎： 例えば、メディアセンターで外国語の「アウトプット」をつくる場所にできるか？という問題だと思います。

木村： 語学の自習ができるMMLS (Multimedia MultiLingual Space) という部屋が2階にあると思いますが、あの部屋を1階のオープンエリアにもってこられないですか？ それと、論文の書き方をサポートするライティング&リサーチコンサルタントも1階に下ろした方が良いと思います。



木村 紀彦氏 (総合政策学部 3年)

稲崎： そうですね。個人で出来る作業は2階や3階にあるライブラリーエリアでもできると思いますが、誰かの助けが必要なものは1階にあるとわかりやすいですね。

梁瀬： MMLSは昔、3階にあったものが2階に移動しています。ライティング&リサーチコンサルタントのブースなどは1階にあった方が良いという意見があります。

稲崎： 1階は人の行き来がある場所なので可視性が高いと思います。それを活かさない手はないと思います。

井庭： 私が学生だった頃、1年生の秋学期にならないと外国語は履修できないというカリキュラムでした。そのかわり、1年の春学期は言語の総合講座があって、ある週はドイツ語、次の週はフランス語というように、毎週異なる言語が取り上げられました。そして、その言語に合わせて「ドイツ語ウィーク」とか「フランス語ウィーク」というように、キャンパスの装飾や学食のメニューなんかが変わりました。ドイツ語ウィークなのでドイツにまつわる料理、というように。そういう雰囲気づくりがキャンパス全体であったんです。そこで、メ

ディアセンターの中でドイツ語ウィークをやってみるというのはどうかな？ その週はドイツ語研究室の誰かが当番でメディアセンターに詰めていて、イベントをやったり、質問に答えたりする、というような感じで。メディアセンターのスタッフも、最初の一言はドイツ語で対応するとか。

稲崎： 研究室にSAの方がおられるのですが、メディアセンターに出てきてくれて気軽に相談にのってもらえたら、とても助かると思います。

井庭： イベントを毎日やるのはしんどいかな？ でも、何かをメディアセンターでやっても、ORF¹⁾ なんかに行かなくても各研究室が何をやっているかがわかる。そんな「出会いの場」が作れると良いかもしれないね。

松崎： 所属しているサークルでも留学生の歓迎行事などをやっているのですが、あまり知られていないというか、参加者やスタッフのリクルートも先生が目ぼしい学生を口説き落とすというか…

井庭： キャンパスのあちこちで活動はしているのに知られていないことって多いよね。私の研究室でも同じだけれど、2時間のイベントを企画しても、なかなか周知ができずに集客の問題に陥って、結果として内輪の会になりがちだね。だから、イベントというより、研究室そのものがメディアセンターに出てきて、実際の活動をそこでやればいいんじゃないかな。そして、質問や相談があった時だけ対応するみたいなかたちで。

松崎： 日吉の協生館にも出入りしているのですが、その点はSDM²⁾ にSFCは負けているような気がします。もちろん、SFCでも研究室を超えた結びつきはあるのですが、それは「個人の努力」によっている気がします。その点、SDMでは、結びつきを「デザイン」という発想で活動しています。個人だけではなく、研究室も含めて、お互いが創発する場づくりやサポートがあるように思います。



松崎 裕太氏 (環境情報学部 4年)

- 井庭： メディアセンターに出張する研究室は2つ以上が望ましいだろうね。ORFでも同じだけれど、交流が進むのは隣り合った研究室の間だからね。2つ以上の研究室が1週ずつつづらして滞在するようにすれば、2つ以上の研究室と知り合えるよね。
- 松崎： 研究室の組み合わせは違う分野が良いと思います。
- 井庭： 学生主導が良いと思うよ。私もそうだけど、先生を混ぜると、忙しさを理由になかなか話が進まない(笑)。学生による出張研究室という感じじゃないかな？
- 松崎： そういう話になると、SBC (Student Build Campus)³⁾にメディアセンターが関係しないのはもったいない気がします。
- 浅野： メディアセンターには良いところが沢山あるのですが、「全体をまとめる役割」が欠けているように感じます。そういう部分をフレンズが担うことが出来ればと思って活動しています。



浅野 義弘氏 (環境情報学部 4年)

- 木村： フレンズは定期的に活動していますか？
- 浅野： 学期に2個くらいのイベントを行っています。
- 稲崎： 毎日イベントがあると良いのだけれども。
- 松崎： いくらでもできると思います。このキャンパスには企画屋を自負している人たちもいますしね。
- 稲崎： 1階のDVDが並んでいる棚に隣接するスペースを自由に使わせてもらえないでしょうか？ 教室を借りるような手続きで利用できるの良いのですが。
- 梁瀬： 検討は必要ですが、やり方を工夫すれば可能だと思います。
- 松崎： メディアセンターのスタッフの方との関係も考えるべきだと思います。今は、利用者と管理者という感じがします。
- 井庭： SFCでふらっと立ち寄れる場所は、中心にあって動線的にも便利なメディアセンターだからね。期待しちゃうよね。それと、やっぱり、1階の鴨池側にも出口が欲しいよ。そこから外へ出て鴨池で昼寝なんて最高じゃない。α館やθ館からメディアセンターを通って鴨池や生協に抜けるのがキャンパスの大動脈なのだから、その動線上に様々な仕掛けを置けば、自然と認知度が高まると思うよ。

(自分の本を「つくる」)

- 井庭： 少しハード面での要望についても触れてみましょうか。これも私の研究室の活動に絡む話なのですが、冊子やカードをつくる必要があって、デザインは自分たちでも、ものをつくるという意味での製作は外部の業者に委託しています。こういう「本づくり」がメディアセンターでできないかと考えています。これからは、市販の本はそこそこで良いので、学生や研究室でつくった「本」が大事になってくるような気がしています。それを蔵書で受け入れてもらって、他の学生に利用してもらえるようにするとか。
- 浅野： 大判のプリンターも欲しいです。A1サイズが必要なきももあります。

稲崎： ORFの時に冊子を作ろうとしたのですが、結局、ホチキス止めになってしまって、今年も冊子にするぞって研究室のみんなは思っています。

浅野： 自分で作った本が売れたらもっと良いですね。

松崎： 協生館のファブの話ですが、制作した作品を展示するコーナーがすぐ隣にあって、実際に企業の方と商談ができるようになっていきます。「つくる」だけで終わらせない仕掛けができています。

稲崎： 「つくる」から「発信」へ？

松崎： そうそう。

浅野： 教員著作コーナーがあるならば、学生著作コーナーがあっても良いかも？

稲崎： それ良いかも。ハードルが低いから、まずは読んでみようとなると思う。

浅野： メディアセンター2階北側に博士論文と修士論文のコーナーがありますが、そこで知っている先輩の論文があると読みたくなります。

木村： そんなコーナーがあるのですか？

井庭： あるある（笑）。僕の修論と博論もある。博論はいいけど、修論はあまり読まれたくないなあ（笑）。

木村： 学部生の卒業プロジェクトは？

浅野： 卒論レベルはないと思う。でも、各研究室の優秀論文は3階南側にあるよ。

稲崎： ファブについてなんですけど、私の友人にはファブと無縁な人が多いのですが、試してみると、「こんなに簡単に作れる」ということがわかって、次のことにチャレンジできるようになっていきます。

木村： 一般論ですが、総合政策学部の研究室は、環境情報学部の研究室よりも「見せ方」が難しいような気がします。

稲崎： ワークショップじゃないかな？「勉強らしくない勉強」の方が敷居は低いです。お堅いイメージとか、インプット（基本知識の取得）から学ばなければいけないというイメージを崩す必要があると思います。

浅野： 今のメディアセンターは「入口」としてはいい線をいっていると思うのですが、「ガッ

ツリやる」には弱い気がします。その設計は難しいと思いますが。

井庭： 僕が「本をつくる」のが重要だと思うのは、論文はアカデミックなもので、専門家にわかって貰えばそれで良いのだけれども、本はふつうの人に理解してもらう必要があるから、そういうふうを書くということが求められるからです。「他人に理解してもらう」という感覚を学生のうちに知って欲しい。そして、自分の本が書架に入って他の人に検索されて利用される、このパターンができるとうい。自分たちで本を作って、その本がメディアセンターを通じて利用されるというサイクルが、総合政策学部の研究室にとっての「ものづくり」のような気がしてきた。

松崎： 最先端の情報は本にはないというけれども、何かに書いてまとめられなければ、他の人に伝わることもないですからね。伝える手段は重要だと思います。

稲崎： 書くという作業は、頭の中にあるモノを、推敲を重ねてブラッシュアップすることだから、より効率的に知識を身につけることになると思います。

井庭： これからもどんどん技術は進化するし、情報のデータベース化も進むと思います。でも、本というメディアは生き残ると思います。そういうなかで、市販の本を貸し出してくれる機能はあっても、自分たちの本を作る機能がない、というのが今のメディアセンターの大きな課題だと思います。キャンパスには研究者もいれば、将来は編集者になりたい学生もいます。そんな人たちとメディアセンターがコラボすることが、コンテンツ版の「ものづくり」になると思います。

（これまでの価値を見直してみよう）

井庭： それでは、10年後というイメージしにくいかな？ 今後のメディアセンターについて語っていただきましょう。

松崎： 価値創造が問題になるのではないのでしょうか？ 企業がお金を出してくれるとか。

特集 湘南藤沢メディアセンターの25年

稲崎： お金の流れを作るとのこと？
松崎： ゼロをイチにする部分が作れたら良いと思います。例えば、キャンパスにいる専門家を交えた最先端のディスカッションで人を集めるとか。その時に参加料を取るイメージです。
木村： もっと図書館になって欲しいかも（笑）。
浅野： というと？
木村： 本のカバーは残して欲しい。装丁のついたカバーがあったほうが読みたいという気持ちが湧きます。
松崎： 保存のためって聞いたことあるけど、外した方がボロボロになると思います。
梁瀬： 保存以外にもいろいろな理由があると思いますが。



梁瀬 三千代氏（メディアセンター）

木村： 本への書込みも可能にして欲しい。あと、誰がその本を読んだのかもわかるようにしてほしい。誰が読んだとか、アンダーラインがどこに引かれているとか、そういう部分って、本屋で買って来た本ではできないことですから。
井庭： なるほど、それは面白いね。共有しているものだからこそできることでもある。Kindleでは書込みが共有できる時代なのに、リアルな紙の本では書込みの共有はできないってというのは残念なこととも言える。1冊しかない本に書き込みをするのは問題かもしれないので、複数同じ本を用意して、この本は書き込んでも良いという本も提供するというかたちかな。
稲崎： 知見のつながりですね。

松崎： 人に関する情報も発信して欲しい。沢山借りている人とか、この人が読んだ本のリストとか。そういうのってできませんか？
梁瀬： 個人情報の問題もありますので。
木村： であれば、ボランティアで「俺読んだ」と名前を書く欄があっても良いかも？ 自分で情報提供を許可すれば問題ないですよ。あと、ブックフェアもやって欲しいです。
井庭： ブックフェアはありだね。あるテーマを決めて、教員や学生が選定する。
稲崎： それが「本の福袋」という企画ですよ？
浅野： そうです。企画者も他の人から本を紹介されて「こんな本があったのか・・・」という体験をしていて、それを他の人にも伝えたいと思ったそうです。
井庭： あとは、やっぱりコーヒーを飲めるようにしてほしいよね。どちらにしる貸出された本はコーヒーを飲みながら読まれているのだから、館内だけ禁止するというのもね。今は世の中の書店でもカフェが併設されていて売り物の本もそこで読めるわけだし。
松崎： カフェは欲しいですよ。
井庭： 保存しなきゃいけない希少本もあるだろうから、大事な本は3階に退避していただいて（笑）、そうでない本はコーヒーを飲みながらでも読めるようにする。本を読む以外の人も、コーヒーを飲みメディアセンターに来るようになるだろうし。
浅野： あと、座り心地の良い椅子が欲しいです。
木村： 鴨池も含めてメディアセンターにすれば良いのに。
井庭： ほう。僕もメディアセンターは空間的にちょっと人工的過ぎると思っていたので、たしかに外の自然も取り入れちゃうのは良いね。借景というレベルを超えて。やはり、1階の鴨池側にも出口をつくって、オーブンテラス風にして…。
稲崎： 鴨池の湖畔に机と閲覧席が置けたら、天気の良い日は最高ですね。
木村： 僕は人との出会いは不要ですから、本との出会いを作ってください。
井庭： 本との出会いね。そういう意味では、本をメディアセンターの中だけに置いておくの

も考えものだよ。建築の本は建築関係の研究室や教室の隣に置くとか。

松崎：でも、研究室で囲い込むようになったら本末転倒ですよ。囲い込みは創発を阻む要因ですから。

井庭：フリーにアクセスできるようにはするとして、メディアセンターの本をキャンパスに分散して、余った書架スペースを今まで語ってきたような新しい活動のためのスペースや学生がつくった本を置く場所にするってというのはどうだろう。

木村：あとは、売っている本には、本の販促は兼ねた「帯」がありますけど。あれを自分たちで作れないでしょうか？ 他の人がその本をどういう風に紹介するのか気になります。例えば借りた人が、この本のここが面白んだということを書いたり、面白かったら帯に推薦文を書いたりできるのはどうでしょう。

井庭：帯、いいね、それ、面白い。いずれ、帯だけの展示会なども面白いかもしれない。

松崎：本日の座談会のような「場」が欲しいです。継続して欲しいと思います。

木村：移動式図書館ってありますよね。メディアからキャンパスの各所に配達するサービスも欲しいです。特にSBCが出来たら、学習室には届けて欲しいと思います。あと、本屋で個人が買う本と図書館の本の違いを出して欲しいと思います。先ほども述べましたが、誰が読んだという履歴や、例えば線を引いたり書き込んだりすることで他の人が面白いと感じたことの共有というのは、個人の蔵書ではできないことなので実現して欲しいと思います。

(クロージング)

井庭：今日は皆さんとお話をしてきて、「自分の本をつくる」ことの重要さが整理できたような気がします。また、皆さんが指摘していた「出会いの場」という機能も重要でしょう。出会いのきっかけ作りには協力できたらと考えています。また、最後に「ルールを見直す」という話ができただのも

良かったと思います。本への書込みに話を戻しますが、同じ本が三田や日吉と藤沢で所蔵していたとします。書込みがなければ「同じ本」ですが、学生や研究者による書き込みがはじまると、書き込みを許可された藤沢の本と三田や日吉の本とは全く別の本になります。予約を入れてでも「藤沢の本が借りたい」となるかもしれません。こういうことに取り組んで欲しいですね。

最後に、外部環境はこれからも変化していきます。変化に対応し、より面白い・新しいことを仕掛けていくには、現状や常識への「崩し」が欠かせませんが、その崩しを行える学生が今後もSFCから出てきて欲しいと思いますし、そのような学生たちに「メディアに行く」と選ばれ続けるような湘南藤沢メディアセンターであって欲しいと思います。本日はありがとうございました。



注

- 1) ORF (Open Research Forum) はSFCで行われている産官学連携による研究成果の発表と、研究シーズ(研究の種)の紹介による産官学連携の推進を目的に、慶應義塾大学SFC研究所が主催するイベント。
- 2) SDMは神奈川県横浜市の日吉キャンパスにあるシステムデザイン・マネジメント研究科。
- 3) SBC (Student Build Campus) はSFCで整備が進んでいる滞在型教育研究施設「未来創造塾」の一環として、未来創造塾EAST街区で展開されている、学生・卒業生ならびに教職員が参画して自ら計画を立案し、施設の建設にも加わるという構想。